



関西支部報

http://www.jackansai.com

関西学生山岳連盟のこと～戦後編～

金井良碩

第二次世界大戦の中、学徒動員により戦場に赴いた多くの岳友がその尊い命を散らしていった。また、終戦時の日本はとても登山するなどの悠長な時代ではなかったと推測されるが、そんな時代にあっても、次の時代を目指す若者達は、動員で散らばっていた学生達が大学に戻るのを機に、したたかに山岳部再建の道を探り、そして新たな山岳部を再出発させている。

関西学生山岳連盟報告復刊第1号(通算9号)が発刊されたのは昭和32年である。その前年に日本山岳会はマナスル登山に成功していた。こうした時代背景の下、この「報告」では、各大学がどのようにこの10年間を歩んできたのかを詳細に述べている。巻頭の辞の中で、「時報は戦後既に第10号を数えるにいたっている…」と記されており、「報告」が刊行されるまで、山行報告を主とする「時報」は定期的に出版されていたようで、学生山岳連盟所属の各大学がこんな時代にあっても山登りを継続し、新たな道を探っていたことが伺える。

この9号冒頭に記されている加盟校名を見ると、すべて新制大学名となり、戦前編で活躍した旧制高校はなくなっている。戦前の三高や浪高はそれぞれ帝国大学と

もに、新制京都大学と大阪大学とに名を改めている。また、甲南高校は甲南大学となった。大阪商大は都島工専などと統合され大阪市立大学となり、神戸商大も神戸工専などと統合して神戸大学となった。統合により蛸足大学と呼ばれた校舎の分散、また、昭和24、5年ごろの旧制と新制の混在など数々の困難を乗り越えながらの山岳部の再建であった。そんな中、学生山岳連盟の組織を維持継続し、更に強化してきたのである。

この9号が発刊されて3年の後に10号が出され、以後14号(昭和39年)まで毎年継続して出版され学生山岳連盟の最盛期を迎えるが、その後4年飛んで昭和43年に第15号が出版された後は今日まで途切れたままになっている。関西支部の委員でもあった小林治俊さんが隊長となって、解禁なったカラコルムへ「関西学生山岳連盟OBの会」で登山隊を組織し、セントII峰(7,343m)の第3登を果したのは昭和53年のことである。したがってそのころまでは学生山岳連盟の組織は維持されていたものと考えられるが、「報告」が出版されていないため、その足跡をたどることは出来ない。

ここで、10号以降に記された主な記事を紹介する。

編集後記	20	「本山寺山森林づくりの会」作業報告	13	追悼 住吉仙也さん	7	関西学生山岳連盟のこと～戦後編～	1
自然保護行事	19	沢例会	12	支部山行報告	7	平成27年度夏季懇談会報告	3
支部分行計画	17	4000山グランプリ	11	4000山グランプリ	7	藤木祭に参加しました	4
受贈一覧	17	尾野益大	13	関西支部県境縦走31	9	関西支部設立80周年フォーラム講演	4
第26回 藤木祭会計報告	16	立野里織	10	4000山グランプリ	10	孤高の登山家植村直巳を語る	4
ルーム日録	17	山内幸子／前田正彰	11	関西支部県境縦走30	8	平林克敏	4
新人会員	16	茂木完治	12	4000山グランプリ	7	大野義照	7
第3回委員会議事録	15	尾野益大	13	支部分行報告	7	橋本圭之輔	8
会務報告	15	秦 康夫	14	4000山グランプリ	7	家段勝好	9
スケッチ同好会例会の報告とご案内	15			関西支部県境縦走32	10	村田かおり	9

1958年(昭和33年)に初めて女子山岳部が登場し、大阪女子大が女性の肉体的、性格的、社会的ハンディキャップを認識しながら女性独自の山行スタイルを追及して、女子山岳部の方向について論じている。11号では、阪大と京大が共同で積雪期の黒部を取り上げ特集記事にし、同志社は積雪期の利尻岳山行の報告をしている。12号では加盟校が連携して、剣岳西面と東北の山について研究発表と山行報告を行っている。また、増加する女子部員の課題について座談会を開催し、数々の事例をもとに男女共存のあり方や結婚後の山行などについて真剣な議論がなされている。

13号ではいよいよ海外登山が特集されたが、この時代には、8千メートル14座は、ゴザインタン(シシャパンマ)を除いて既に登頂されていた。特集では、わが国の黎明期(明治時代)からのヨーロッパやヒマラヤの探検史に始まり、昭和30年代後半までの海外遠征史を調査し、報告している。また、連盟所属大学の海外登山について、比較調査、研究を実施して、登山隊派遣までの経緯を装備、資金、登山許可などについて分析している。昭和28年の京大のアンナプルナを皮切りに昭和30年代中ごろにかけて加盟大学は、カラコルムやヒマラヤそしてアンデスに海外登山隊を派遣し、多くの初登頂を成功させている。しかしながら、これらは卒業生を主体にした各大学の山岳会が主導したものであった。遂に昭和37年に至り、京都大学山岳部は現役の登山隊を組織してインドヒマラヤのインドラサン(6221m)の初登頂を成功させるが、この模様を「京都大学パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊の出発まで」と題して、生みの苦勞を多岐にわたり克明に報告している。

14号では、京大山岳部がインドラサンに引き続きアンナプルナ南峰(7219m)の初登頂を果たしたことから「大学山岳部とエクスペディション」と題して、わずか数年間の登山経験しかない学生が、準備段階から交渉や資金といった課題を解決するのは困難で、卒業生中心の学士山岳会のノウハウによる所が大きいと指摘し、OBに頼らないエクスペディションはどうあるべきかの課題を投げかけている。また、この初登頂記録は次号の15号で「ガネッシュ'64」として報告している。

15号では「大学山岳部の展望」の特集を組み、多発する遭難事故を契機にリーダーシップの欠如が問題視され、OBとのかかわりと現役学生の主体性が議論されている。各加盟校は大学に戻れば、それぞれOB組織を抱え、大なり小なり技術的資金的支援を受けている。しかしこの場では、あくまで学生同士の連携といった取り組みがな

され、一方では、OB以外の登山経験者である社会人山岳会のリーダーたちとも意見交換し、新たな知識の吸収に努めている。

この号を見る限り、加盟校は28校に増え、従来の京阪神3ブロックに加えて女子ブロックが立ち上がっており、大学山岳部がまだまだ活発な様子が伺えるが、前述したように「報告」はこの号を持って廃刊となった。現役学生の話では、「京都学生登山交流会」という名のグループが京都府大、京大を中心メンバーに組織され、関西の山岳部やワンダーフォーゲル部との連絡体制がとられているとのことである。かつての学生山岳連盟ほど組織だったものではないようだが、学生達が自主的に横の連絡を取り合っていることは、学生山岳連盟の理念とも一致するので新たな動きに期待している。

最後に各号の概要一覧を示す。

第9号	1957年1月発行	加盟校数16校	
		編集長：京都大学	新井 浩
第10号	1960年11月発行	加盟校数23校	
		編集長：神戸大学	夏原政雄
第11号	1961年11月発行	加盟校数24校	
		編集長：神戸大学	宇田宏成
第12号	1962年9月発行	加盟校数24校	
		編集長：京都大学	宮木靖雅
第13号	1963年9月発行	加盟校数25校	
		編集長：大阪工大	浅田晏司
第14号	1964年12月発行	加盟校数25校	
		編集長：関西学院	米沢正明
第15号	1968年7月発行	加盟校数28校	
		編集長：神戸大学	金井良碩



シクラメン

平成27年度 夏季懇談会報告

8月26日(水)18時よりホテルグリーンプラザ大阪・アネックスで夏期懇談会が開催された。

例年の講演に代わり1978年公開の長編記録映画「白き氷河の果てに」を、K2登山隊員で登頂者でもある重廣恒夫氏の解説を聞きながら登山活動に絞って鑑賞した。

終了後、別室の宴会場に移動し、平林克敏会員の乾杯のあと、会員相互の懇談に移り定刻お開きとなった。

夏季懇談会に参加して

山田 健

記録映画「白き氷河の果てに」を見たのは2回目である。1回目はK2遠征が行われた翌年、映画館で見た。大学生だったこの時には海外遠征の経験もなく、単純に「凄いなあ、行ってみたいなあ」という感想しかなかった。その後、この映画に描かれているようなカラコルムやチベットの荒々しい自然や高所での荷揚げの苦しさを自分自身が経験した。さらに偶然であるが昨年、このK2遠征について書かれた2冊の本（広島三朗著「K2登頂幸運と友情の山」、本田靖春著「K2に憑かれた男たち」）を古本屋で見つけて読んでいたため、準備段階から実行段階への流れも理解していた。そうした下地ができた上での今回の鑑賞ではより多面的にK2遠征を感じることができた。隊員の苦しそうな息づかい、高所でのラッセルの苦しさ、風の音を作る不安感など自分自身の経験と重なるところが多く、初めて見たときよりK2登攀の凄さを実感した。それに加えて印象的だったのは、登頂成功時の新貝隊長の涙である。映画では描かれていない五年間にわたる準備段階での苦勞、すなわち登山許可の取得工作、資金調達、日山協が実施主体になるまでの調整など大変な苦勞が、困難な登攀の苦勞と合わさっての万感の涙だったのだろうと想像した。隊長だけではない。すべての隊員の遠征に賭ける強い思いとひたむきさは悲壮感が漂う。あるいは仕事や家族を犠牲にし、あるいは多額の借金をしてK2の頂上に立つために、ある意味人生を賭けている。そのことは、第4次アタックが中止になって登頂をあきらめることになったとき、二人の隊員が頂上に向かって叫んでいる場面に集約されているように思った。

K2遠征のように大量の物資をつぎ込み、大遠征隊を編成しての登山は、四十年近く経った今はもう誰も行う者はいない。ヒマラヤ遠征は遙かに簡単になった。今行

く人たちは人生を賭けるというような悲壮感を持っていない。もっと気軽に行って、しかし簡単に遭難してしまうことも事実であろう。懇親会の際に重廣さんは「最近遠征に行く人は防衛体力(あるいは耐力か?)がない」と話されていた。K2遠征に行った隊員は全員国内や欧州の冬の岩壁で鍛えられ、悪天候などの危機にも耐えられる「防衛体力」のある者たちであったが、今遠征に行く人はそこまで鍛えていないと言う。重廣さんたちがK2の頂上アタックをしたとき、明るいうちにキャンプに戻れないような時間になってもアタックを継続していた(事実、登頂時刻は午後6時50分、C6帰着は午後11時半ごろになっている)が、あのメンバーだからあの判断になったのであって、今の若い人にやらせると危険であると。確かにそう思う。私はこの10月から神戸大学のチベット遠征の隊長として、20歳代の若い隊員を率いて現地に向かうが、この言葉は私にとって現地での指揮に大いに参考となると感じた。

実は、映画の登頂成功のシーンのときに、重廣さんの表情の変化を期待して、映像ではなく氏のお顔を密かに観察していたのだが、クールにもパソコンの画面を眺める氏の表情の変化はなかった。今度機会があれば、K2登頂を思い出す時どのような気持ちなのか聞いてみたいものだった。

平成27年度夏季懇談会参加者一覧

新井浩 新本政子 井関正裕 岩崎しのぶ 魚津清和 浦上芳啓 大西康郎 大西由美 岡田輝子 斧田一陽 金井健二 金井良碩 川久保美美子 清瀬祐司 釘本武昌 久保和恵 黒田記代 小島一喜 小寺佳美 薦田佳一 阪下幸一 重廣恒夫 城隆嗣 助川征 高木稔 高木知子 田島聖子 辻和雄 戸島泰三郎 中島隆 中谷絹子 中村久住 西尾俊子 野口恒雄 野村珠生 橋本圭之輔 秦康夫 平林克敏 廣瀬健三 廣田猛夫 松仲史朗 水谷透 宗實慶子 宗實二郎 村田かおり 茂木完治 山内幸子 山田健 山本一夫 (会友) 青木昭 黒岩敦子 若林朋世 (会員外) 井田基紀 岡田和泰 小形修司 栗尾雅恵 坂口和子 坂口直樹 佐々木原恭一 四方寛之 多川寿子 佐藤麟 中田浩子 西岡陸代 西野修一 舟貝政夫 舟貝良子 松井道大 渡部寿代

講演会 69名(会員49 会友3 会員外17)

懇親会 52名(会員44 会友2 会員外6)

藤木祭に参加しました ● ● ● 中村久住

平成27年9月27日(日) 素晴らし秋晴れの中、第26回「藤木祭」が高座の滝・藤木翁のレリーフ前で開催されました。主催者の山岳3団体とご子息の藤木高嶺さんご一家、藤木摩那子さん、芦屋市長、

アシヤユースコーラスの皆様と約120名の方々が参加されました。

主催者を代表して「レリーフの除幕式を行った昭和38年ころの、高座谷第一堰堤は、奥高座の滝の上流より流れ出した水は清流となり、又緑の木々に囲まれた快適なテント場でした。峰々を渡る涼しい風、美しい芦屋の夜景を見ながら、明日登るロックガーデンの岩場に胸を轟かせたものです。早朝地獄谷岩登り、ゲートロック、A懸垂岩、今は崩壊したB懸垂岩でアプミの練習を行い、墓場はアイゼンの練習に最適です。尾根を越し高座谷へ、キャスルウォール、ブラックフェースを登るともう夕方です。ザイルをしまい落ちる夕日に染まりながら、これからの山行に夢を描いたものです。その頃にはイタリアンリッジはすでに崩壊していました。」と挨拶し、藤木九三作・ザイルテクニクと氷斧の変遷より「ザイルがせがみ ピッケルが泣き出した 雪線恋しと泣き出した 岩と雪との故郷の夏は 氷河の岸ちかく エーデ

ルワイスの花が咲く アルペン恋しと泣き出した」の詩を朗読しました。開拓期の登攀者らしい素敵の一節です。

その後、「この時期に、山を愛する関西の山仲間が集まり、旧交を温められる事は大変意義深い事であると考えます。私たちの身近なところに、日本のロッククライミング発祥とされる“芦屋ロックガーデン”が有る事は、私たちの誇りであり、かけがえのない財産です。六甲山は、豊かな自然を身近に感じることができ、気持ちをリフレッシュするのに最適です。最後に成りましたが『藤木祭』のますますのご発展をお祈りいたします。」と芦屋市長がご挨拶されました。

続いて白馬堂・浅野晴良氏からは「今、山と高原地図の六甲・麻耶編の調査執筆を行っています。

国土地理院では「横ノ池」と有りますが、山と高原地図では「横池」と記載されています。近年台風の影響で、土砂崩れが多く発生し、登山道が通れなかったり、コースが迂回したりと変化しています。その様な訂正や微調整を毎年行っています。

地図の変化や間違いが有れば、是非お知らせ下さい。沢山の方が地図を片手に六甲山に登られる事を願っています。」と『地図を持って山へ出かけましょう』とのお話しがありました。

関西支部設立80周年フォーラム講演

孤高の登山家植村直巳を語る

平林克敏

はじめに

植村君がマッキンリーで消息を絶った1984年2月12日から31年が過ぎました。

氷河を見たいとの一心から4万円をポケットに移民船に乗り込みロサンゼルスに渡ったのは1964年の事でした。資金を稼ぐためカリフォルニアでぶどうを挽ぐ仕事をしていました。当時、米国の一般労働者の賃金は日本の4倍程度でしたから格好のアルバイトであったのでしょう。その後バスで大陸を横断、ニューヨークから船でルアーブルに渡り、シャモニーのスキー場で住み込みで働き始めました。ここから始まる20年間の行動が彼の短い生涯の中で私達に示した20回に及ぶ登山や探検・冒険の全てであります。これらの記録は植村自身の著書として11冊を上梓しておりますが、多くの方々が植村を語り、画像にし、語り尽くせないほど彼の行動を評価し今

日に至っております。

1) 故郷但馬の地が育んだ環境と気質の中に植村君が宿し、育んだ一貫して変わらない植村直巳像があります。

一生懸命で辛抱強く、他人に対する心くばりを優先する優しさがあります。黙ってもくもくと行動し、粘り強い等々ですが、笑顔が綺麗で素敵となると女性ファンにはたまらないのでしょうか、有名過ぎて少々神格化されてしまうほどで、未だ人気の高い植村像を見る昨今であります。

しかし公子夫人の発言からは別の側面を窺い知ることができます。

「ダメなものはダメ」と言われると「フーン」と言うが、次の日にもまた同じ事を言い出す。食べ物に

好き嫌が多く、柔らかい物、ふわふわしたものは駄目、また実家から貰ってきたお豆腐を「これ、どうした」と言うから貰ってきたと言うと「おれは乞食ではない」と言って食べなかつたりする事もあった様です。怒っている時は梅干とご飯だけ食べて、私の作ったものは何一つ箸を付けない。

といった強情さもあったようです。お互い家庭に帰ると違った顔の出る事は植村に限った事ではないでしょう。植村の実家に行き、但馬の方々に接した公子夫人の感想は、「他人に鷹揚で親切が当たり前、不器用ながらひたむきに生きてきた方が多い事に気付かされた」とは、直巳を知る妻として、蓋し名言と言えるでしょう。

2) 組織の中で十分に能力を発揮できる人物である事を知ったのはJACのエベレスト登山の時でした。私は登山隊の物資輸送と酸素の責任者をしておりました。この折の植村君との2、3の例を紹介します。

カトマンズからBCまで1,050個(30キロ/個)余りの輸送では随分植村に助けられました。400個をシェルパとポーターだけに任せ、490個余りをピラタス・ポーター機でルクラに空輸、残り160個を隊員35名と165名のポーターで運びました。この荷物のルクラヤタンボチェにおける受け取り・保管の手配は植村君に依存しました。私は初めから植村と気が合いました。彼が明大隊の1965年のゴジュンバカン初登頂者となるのですが、この時の相棒はペンバ・テンジンでした。ペンバは私の1960年のアピ、1963年のサイパル登山と西ネパール600キロの横断の時に雇った最も信頼できるシェルパの一人でした。だから誰が何と言おうと、私と植村はエベレスト隊の荷物の大半をペンバ・テンジンが率いる輸送隊に何一つ躊躇することなく委ねることにしました。またBCでクレバスを渡る梯子が不足する話が出ますと、私の横に居てすぐ手配をする手際の良さを見せたのも植村でした。

BCではシェルパや高所ポーターが50名と大所帯で、顔と名前が覚えられない不便さから、身上調書を作る事を提案すると、記者にポラロイド写真を依頼、シェルパの履歴も加えた調書を作ったのも植村でした。

私は植村君について忘れる事のできない思い出があります。登山終了後、300個余りとなった物資を2隊に分けBC撤収となりました。“平林さんは輸送責任者だからな”等と冗談を言いながら、全員がわれ先にと走るように下っていきました。次の日のために誰か残ってほしいと思いましたが、その時、隊員に精神的余裕は既にあるませんでした。突然植村が「僕、残ります」と言ってく



れました。BC最後の夜は体調の悪い医師に付き添った住吉ドクターを含め4人で一夜を過ごしました。翌朝エベレストを去る日、植村と二人、語りながらゆっくり氷河を下りました。「僕、日本に帰りたくないから平林さんから隊長に話してくれませんか」と言い出すのでびっくりしました。第一登頂者が日本に帰らないなどという事は考えられないことと論じました。

この時、彼に、別の思いがあった事に気付いたのは、帰国後1ヶ月ほど経ってからでした。休む間もなくカナダに行き、8月26日単独でマッキンリー登頂を果たしたのです。

植村君は前年のエベレスト偵察隊に参加のあと、帰国せず現地(クムジュン)で越冬しました。この越冬は、本隊にとっていろいろ手助けとなりましたが、何故越冬したのか、今回お話しさせて頂くこともあって、この辺の事情を2週間ほど前に田辺壽さんと雑談したんです。田辺さんの言うには、

「あいつは下宿を引き払ってきたから帰る所がないので、ここに残りたいと言ったんだ」

「居残りは奴の癖かな……、居心地はクムジュンの方がいいもんな……」

エベレスト登頂後も現地に居残るか、カナダの村に行つて、マッキンリーに登る事の準備をしたかったのでしょうか。彼の次なる思いにかけるとはたかな心境は分からないでもないのですが…。1966年7月モンブラン、同年10月24日キリマンジャロ、1968年2月5日アコンカグア、1970年5月11日エベレストに続き、大陸最高峰を極めた一人となりました。だから次は南極大陸だったのでしょう。

エベレストを通して私が知った植村像は、組織の中でなすべきことを流動的に考え、行動できる人であり、自

己中心の発想など全く無い人であったと言う事が出来ません。

3) 単独行に対する評価と目指したもの、その第一は、南極大陸の横断3,000kmと南極最高峰ビンソン・マシフの登頂でした。腕試しとして日本列島を北から南端まで約3,000kmを歩き通した行動力でした。その後グリーンランド、シオラバルクで犬と暮らし犬糧の作り方、扱い方を学ぶことになるのですが、この動機は1972年1月～3月に訪れたアルゼンチン南極基地で準備不足を実感した彼の大きな挫折でした。

犬と共に過ごした日々が、彼の単独行を本格的に目指した行動の始動であったと考えられます。その後は皆様もご存じの北極圏12,000km、1978年4月の北極点へ、更に同年5月～8月にかけてグリーンランド3,000kmの犬糧の旅など次々とやり遂げていきます。驚くべき行動力でした。

多くの人の世話に感謝しながら最後は一人。何故なのか。彼の言葉を引用すると、一人のほうが気楽、わずらわしさが省ける、思うように出来る等がその理由のようですが、一人だと全てがより厳しくなるし、大きな苦勞を背負う事になります。この彼の覚悟が彼を前進させる原動力になっていたのだと考えています。

4) 植村の業績の評価に対する私見を理念・信条という立場から考えてみますと、植村は自分の登山・探検・冒険行全てを「行動」と呼んでいます。

とにかく目標を定め行動を起こし前進する。やってみなければ越えられない。思いがあれば必ずやれるが彼の信条でした。欧州の連中は登山や探検・冒険活動については文化的成熟度が高いためか、植村亡きあとも彼の業績を高く評価しておりました。

私が欧州に広がるダンロップの経営を見ている時の経営理念は「行動・体験・創造」。人は行動し、体験し、そして創造する。また「情熱と行動のみが結果を生む」等とする社是を理念や信条として掲げ、登山の経験や欧州の探検思想を語りながら経営の話をしたものです。こんな時、植村君の話を交えることもありました。植村君が自らの冒険を「行動」と呼んでいた信条と肝胆相照らすものがあつたからです。

5) 彼を壮大な探検や冒険に駆り立てたもの、人の心を突き動かすものとは何か、人の心に潜む本質について私の考えを述べてみます。

植村も今日お集まりの皆様方もそうですが、人の心の内に宿す「何にものか」に突き動かされ行動を起こし、それを越え、更にはほかの「何にものか」に挑戦する。それが己を高め磨かれるのだと思います。この「何にものか」こそ人の行動の中核をなすものであり、登山や探検活動のみならず、企業や学業の研究、技術開発など創造的な事柄すべてについて言える事があります。

人はどう思い、どう行動するかが基本となりますが、所詮、私達には人に説明し難いこの「何にものか」を内蔵し、死ぬまで求め続けなければならない、言わば宿命のようなものと考えています。

この種の表現を、人間が基本的に具備している能力、即ち、知りたい欲求、未知への憧れ、真理の探求、創り上げていく喜びや感動等と称しています。しかしこの「何にものか」は思考レベルでのみ知る事のできる超自然的知覚によるものでありますから、形而上学的に理解する一助として登山を志す人々は先駆者的、創造的思考をパイオニア・ワークとかフロンティアスピリッツ等と呼び、今日に至っております。しかし、これとて私達の深い所にある心を表現するに十分なものではないはずであります。

植村君がこの事をどう思い、どう考え、どうしたかったのか彼の本質を知る事は出来ませんが、彼はこの自らの心を「行動」で示してくれた私たち山仲間の第一人者という事だけは確かであります。

次世代の子供達に夢と希望を抱かせ、いまや子どものみならず多くの人々に感動と生きる力を与えてくれた孤高の登山家であり探検家であったと心し、今日お集まりの多くの友人達と今は亡き植村直巳君に思いを馳せ、私のお話とさせていただきます。



追悼 住吉仙也さん

大野義照 (大阪大学山岳会)



住吉仙也さんが10月5日にお亡くなりになりました。夏の初めまではお元気でしたが、7月末の猛暑で体調を崩され、8月末に入院。治療の甲斐もなく、眠るように旅立

れました。1926年10月22日生まれ、享年88歳でした。

住吉さんは1954年大阪大学医学部卒業。1959年(32歳)にまずJACヒマルチュリ登山隊に参加されました。阪大では1961年P29峰第1次登山隊(副隊長)、1969年同第3次登山隊(隊長)、1970年同第4次登山隊(登攀隊長)に参加し、P29峰初登頂に導かれました。また1970年には日本人が初登頂したJACエベレスト登山隊にも参加、その後も第2次RCCエベレスト登山隊、ジャーヌー隊、ナンガバルバット隊、冬季サガルマータ南西壁隊に参加されました。72歳になってからも1998年と1999年に大阪山の会の数か月に及ぶ西北ネパール探検の旅に参加されています。一方、本業の医者として66歳までお仕事をされていました。

私は1970年ポストモンスーンの第4次P29峰登山隊に参加し、初めて住吉さんと一緒に登山をしました。ベースキャンプまでブリガンダキ沿いに進む21日間のキャラバン中、同じテントで過ごし、大学卒業後に船医として

海外に行かれたことから、ヒマラヤ登山だけでなく、ヒマラヤを越える鶴やアポロ蝶、ヒマラヤの青いケシのことなど、いろんな話を聞かせていただきました。酒は大好きで、集落が少なく、店のないブリガンダキ沿いでは1日に1つか2つ通過する村の民家で隊員が求めたロキシー(焼酎)を皆と楽しませていました。

P29峰は渡部洋隊員とシェルパのハクバ・ツェリンが登頂しましたが、下山中に滑落し、2人とも死亡しました。当時は性能の良い無線機はなく、登頂の確認は、住吉さんが前進キャンプから望遠鏡を通して撮った写真によってでした。私は最終キャンプまで2人を送って戻り、住吉さんのそばにいましたが、住吉さんご自身も、うまく写真が撮れているか半信半疑でした。結局、登頂は認められましたが、酒を飲むと「もう一度行きたい」とよく言われていました。

阪神淡路大震災では夙川の木造2階建ての自宅が大破しました。2階部分が崩れて1階は大きく傾き、寝ていた1階の部屋の梁が枕元に落ちてきましたが、半身を起こして新聞を読んでおられて無事でした。その部屋でしばらく住み続けられ、見舞いに來た人たちと毎夜のように宴会が開かれました。「ここはベースキャンプより快適だ」と言っておられましたが、市の勧告を受けて退去され、解体撤去の後、現在の家が建てられました。

それから20年、私は毎年、正月をはじめ折々に訪ねていましたが、もう主はおられません。何事にも動じず、自由に生きられた大先輩でした。

支部山行報告

支部山行15-3 4000山グランプリ
薙刀山・野伏ヶ岳

辻 和雄

4月18日(土) 晴後曇

男性陣は前日、莊川にある私の山荘に宿泊し、早朝に辻車で白山中居神社へ向かう。男性陣を降ろし、前日岐阜市に宿泊した女性陣を長良川鉄道の北濃駅まで迎えに行く。

白山中居神社の先にある橋の袂に車を置き出発。天気

は良く、林道に入って間もなく残雪の中を進む。P895を過ぎ和田山牧場跡に到着する。この辺りは、残雪期にテントを張って山スキーや登山をする人が多いと聞けるが、周りに人はいない。野伏ヶ岳へ行く人は南東にのびるダイレクト尾根を登るそうだが、我々は薙刀平から薙刀山(1647m)を往復し、幕営する予定。薙刀平に到着してやれやれと思った。しかし薙刀山への登りは簡単そうに見えたが200m近い登りで案外大変だった。薙刀山への登りで重廣さんの調子が悪そう。後で分かったが、和田山牧場跡あたりで足を挫いた様子。薙刀山は、ただ

っ広い雪原となっている。展望は良い。薙刀平に戻り幕営の準備を行う。重廣さんが皆に雪上でのテント設営の要点を説明。明日の天気は下り坂とのことで、重廣さんの足が心配だ。

4月19日(日) 曇後雨



野伏ヶ岳頂上にて 写真提供：重廣恒夫

5時に幕営地を出発し、野伏ヶ岳(1674m)へ向かう。重廣さんの足は傍目には問題なさそうだ。天気は曇りだが何時まで続くのか。野伏ヶ岳は300名山の一つだが、登山道はなく、雪のついていて時しか登れない。幕営地からは200mほどの登りだが、朝一番の登りはキツイ。やっと野伏ヶ岳に到着。360°の展望。野伏ヶ岳からは、至る所で雪面が切れ、ブッシュに行く手を阻まれ、コースも大きく迂回せざるを得ない個所も現れて歩みが遅くなる。途中からアンザイレンする。降り出した雨も激しくなり、小白山までの予定を切り上げ、手前の小白山北峰で下山となる。

帰りに温泉に寄る時間があるかなと期待したが、土砂降りの中を杉山(1180m)経由で駐車場まで下ると午後4時も過ぎていたので、ウイングヒルズスキー場に併設された「満天の湯」を横目に帰宅の途についた。

【コースタイム】

18日 白山中居神社先駐車地09:36—10:31和田山牧場跡—15:21稜線合流点—16:38薙刀山—17:22P 1481—18:00幕営地

19日 幕営地05:06—06:25野伏ヶ岳—08:37橋立峠—10:40小白山北峰—13:52杉山—16:07道路合流点—16:15白山中居神社先駐車地

【参加者】

重廣恒夫 黒田記代 野村珠生 松仲史朗 村田かおり
立野里織 辻和雄 計7名

支部山行15-12 県境縦走30 鴻応山～狩待峠～採石場

橋本圭之輔

6月20日(土) 薄曇

阪急池田駅7時30分集合。阪急バスで牧バス停に向かう。バス停より前回到達点の鴻応山へ登山道を上り返す。鴻応山頂から少し東側の府境界復帰点に1時間ほどで到着した。境界稜線の藪は薄く、高低差も少ないので行程がはかどる。標高点470の車道に出る。さらに一時間ほど進むと住宅地の一角に出た。地図には茨木ローズタウンとある。住宅が府境界ギリギリに立ち並んでいるので裏庭を通らねばならず、住宅内道路を住宅地のはずれまで歩く。

県境に戻って少し行くと大阪側から遊歩道が合流してきた。さらに展望台も現れた。遊歩道は府境界にそって延びており、しばらくは散歩気分で遊歩道を歩く。右手大阪側にはロジ風の建物がありキャンプ場のようなのである。昭文社の地図を見ると「青少年野外活動センター」とあった。センターのエリアを過ぎると遊歩道は終わって藪になったが、一時間ほどで見立団地(茨木台ニュータウン)手前の車道に出る。この団地も京都側にあり、住宅の裏は境界に沿ってフェンスがある。さらに大阪側には車道にそってL字型のフェンスがある。2mもあるフェンスを苦労して乗越えて行くと、またフェンスにさえぎられた。今度は足元に金網が破れているところがあり通過できてホッとする。

団地を外れまもなくP496に着き、そこを下れば狩待峠で予定より少し早く到着した。ここで府境界を離れ、長谷口バス停へコンクリートの道4kmを1時間かけて歩く。今日のコースは地形も複雑でなく高低差も少なく藪も酷くなかったので快適な縦走だった。

6月21日(日) 晴



茨木採石場内に入る 写真提供：重廣恒夫

JR茨木駅8時30分集合。タクシーで復帰点の狩待峠に向かう。府境界に踏跡はないが、藪は薄く1時間半ほどで清阪峠に着く。峠からは30分ほどの登りで採石場西端に到達した。

今日のポイントは採石場をどのようにして通過するかである。採石場は幾つも見えてきたが、こんなに真近で、また真上から見るのは初めてである。規模も大きく5社の業者が入っているそうである。

今日は日曜日なので作業はやっていないが、下には重機が小さく見え、標高差は200m、見た限りではとても府境界沿いには下れそうにない。採石場を迂回すれば半日はかかるだろう。時間的な余裕もないので、全員ロープを着けて下降する。上から見た時は何処も切り立っているように見えたが、右に左にルートを取り通過可能な地点を繋ぐ。場所によっては、確保しながら通過しなければならないところもあった。時間はそれなりにかかったが、無事に府道46号線のP206に下りることが出来た。

今日の行程は、さらに安威川を渡り対岸にある採石場を登って神峰山口バス停までの予定であったが、思わぬ時間を食ったので、ここで終了することになった。

タクシーを呼んだが来てくれないので、仕方なく生保バス停まで安威川沿いに約10km、コンクリート道を歩くことになった。途中、反対運動で話題になった安威川ダムの建設現場を見ることが出来た。

【コースタイム】

20日 牧バス停08:21—09:37府境復帰点—09:44鴻応山—11:24 P470—12:32ローズタウン—14:11見立団地—15:14 P496—15:28狩待峠—16:22長谷口バス停

21日 狩待峠09:23—09:48 P463—10:57清阪峠—11:32採石場西端12:00—13:43 P20614:00—16:06生保バス停

【参加者】

黒田記代 山内幸子 岡田輝子 橋本圭之輔 村田かおり (会友)若林朋世 (21日のみ)重廣恒夫 立野里織 山本義博 20日6名 21日9名

支部山行15-13 4000山グランプリ
音無山・大黒山・篠山・観音岳・譲ヶ葉森
家段勝好

7月11日 晴後曇

台風が九州に接近する中、関西・四国から2台が徳島を出発。地元清家さんと松山で合流。雨予報とは逆に、晴れて暑い。新しい作業道を登りはじめるとまもなく、風力発電機のある尾根に出た。山頂では、登山口で見え

ていた宇和海の展望は木立で見えず。途中ショートカットの藪漕ぎで駐車場へ戻る。

車で篠山登山口駐車場へ移動。食事を済ませ、整備された石の階段を登る。登山コースにカンタロウミミズが非常に多い。途中、鹿対策ネットのある平らな場所に出た。ここには篠山参拝用の宿泊施設があったとのこと。山頂付近はなだらかで明るい、曇空で景色は見えない。不思議なことに山頂に小さな池があった。往路を駐車場まで戻り、この日の登山を終了した。

薪ボイラの祓川温泉に立ち寄り、小さな商店で買い出しをして影平公園付近の民家に向かう。夕方は雨予報のため、この家の方のご好意に甘えて宿泊させてもらった。

7月12日 曇後雨



大峠トンネルにて 写真提供：重廣恒夫

車で大黒山の登山口である大峠(おおたお)トンネルへ向かう。昨晩は雨が降っていたが、今はやんでいる。トンネルは崩落危険のため通行止めであったが、北側の登山口へ徒歩で通過する。トンネルを抜ける前に雨が降り出し、雨具を着た。北へ抜けるとすぐ林業用作業道がありそれを登ると尾根に出た。

山頂までは木と雨で景色は見えないが、難なく山頂に着いた。往路を下山するが、登りの際にトラバースで通過した三角点に読図練習を兼ねて立ち寄る。少し藪であった。

下山後、残る譲ヶ葉森へは林道から登る。整備されているとはいえ、急坂の泥道は4輪駆動でも滑る。加塚越の直下に駐車。案内標識に従って尾根を登り、途中背丈ほど草が生い茂る道を通って譲ヶ葉森山頂。そこから加塚越に戻り、4000山ではない音無山へも立ち寄ったが、頂上に立つも時間切れとなりさらに南の三角点は中止して下山した。

【コースタイム】

11日 徳島駅05:00=09:30観音岳駐車場09:38—10:17観音岳10:23—10:47駐車場10:50=11:38篠山駐車場11:49—12:45篠山12:57—13:27駐車場13:30=14:04祓川温泉14:40=15:30影平公園付近

12日 民家04:57=05:46大峠トンネル05:59—08:20大黒山08:35—10:15大峠トンネル=11:31譲ガ葉森登山口11:35—11:52加塚越—12:37譲ガ葉森12:42—13:31音無山13:34—登山口13:50

【参加者】

重廣恒夫 清家一明 村田かおり 若林朋世 栗尾雅恵
長瀬美代子 家段勝好 計7名

支部山行15-14 関西支部県境縦走31
碎石場～余野瀬～勝手坂峠

村田かおり

7月25日(土)晴



高槻碎石場を越すため悪戦苦闘中 写真提供：重廣恒夫

前回の終了地点茨木碎石場入口より出発。府境上の高槻採石場を西の谷沿いより攻略し悪戦苦闘の末、碎石場縁の稜線に乗る。ここまで既に1時間半が経過。猛暑も手伝い汗だくとなる。採石場を左手に眺め関電大黒部幹線710鉄塔を過ぎると、檜の樹林帯に入る。木陰の有難さを噛みしめながら屈曲点を経て竹谷三角点に到着。叢の中だが保護石もある綺麗な金属標だ。屈曲点に戻り、ここより約500mは県境沿いの林道を歩く。708鉄塔200m手前で稜線に戻り、鉄塔を過ぎると急な下りとなる。念のためアンザイレンして慎重に下降し、沢を渡渉するとP551への長い登りである。所々に藪と倒木も重なり疲労が増すが、時折吹く風に助けられP479を過ぎるといよいよ安威川への最後の下りである。P440小休止時に黒田さん差し入れのグレープフルーツで皆元気回

復。緊張する下りは再度アンザイレンにて下降し沢に合流。沢を渡渉し府境界沿いに南へと下ると林道に出た。高ヶ峰橋を渡り1日目の県境を離脱した。

7月26日(日)晴

2日目は朝からの暑い日差しの中、いきなりの急登からの開始である。約20分で稜線に出るとここからは歩きやすい檜の樹林帯となる。P368からP455まで藪もなく順調に進み約40分で到着。これより複雑な府境界を南北にくねくねと進む。P455稜線を南に下り、更に境界沿いを南西の谷へ。栢原川合流からは北に方向を転じ、川沿いに余野瀬三角点を目指す。道路沿いの荒地の縁にあり見つけにくいこの三角点は標示杭や保護石もなく全員で探索の上やっと発見。昨日の竹谷同様金属標だった。ここからは北東尾根を東掛分岐まで登り返しとなる。昨日同様の暑さでほぼ無風。藪こそないが一步一步に汗が噴き出す。東掛分岐に到着するとご褒美の稜線を吹く風が待っていてくれた。人心地つきP457へと歩も軽くなる。樹林帯を順調に北へ進みP457から約600mで東へと大きく転換。ここから二料分岐まで深い藪もなく細かい倒木を避けながらの行程。分岐より北へ勝手坂峠へと下り今回の県境縦走は終了となった。

【コースタイム】

25日 茨木碎石08:01—10:08碎石場縁—10:33△竹谷—11:59沢芯—13:02P551—13:50P479—15:35安威川出合—15:45県境離脱点16:00—16:18徳圓寺

26日 県境復帰点08:31—9:23P368—10:07P455—12:10△余野瀬12:15—13:39P457—15:42二料分岐—16:04勝手坂峠—16:37榎田校バス停

【参加者】

重廣恒夫 新本政子 黒田記代 立野里織 松仲史朗
村田かおり 山内幸子 (25日のみ) 岡田輝子 前田正彰
(26日のみ) 橋本圭之輔 (会友/26日のみ) 青木昭
若林朋世 計12名

支部山行15-15 4000山グランプリ
南アルプス深南部丸盆岳～不動岳

立野里織

8月13日(木)曇

水窪駅よりタクシーで戸中川林道ゲートに向かった。ゲートから林道を2時間半ほど歩き黒法師岳登山口に到着した。取水後、標高差1000mの黒法師岳(2067m)を目指したが、予定を大幅に遅れたので、1240mの地点でテントを張る。

8月14日(金)曇

笹藪の急な登りを進み、主脈尾根出合にたどり着く。霧が立ち込め眺望は望めない。途中小雨が降り出したため雨具を身に付け、黒法師岳に到着した。一等三角点は「×」印になっていた。主脈尾根に戻り、丸盆岳(2066m)へ向かう。尾根は痩せている。カモシカ平を通り、丸盆岳に到着した。昼休憩後、鎌崩へ向かう。生い茂る木々や笹をつかみながら急斜面の上り下りを慎重に進んでいくが、鎌崩の核心部が日没近くになると判断し、鎌崩の始点手前250mの地点にテントを張った。鎌崩の切り立つ稜線を目の前に、明日の天候回復を祈りつつ眠った。

8月15日(土)晴

朝日を浴びながらアンザイレンして出発。鎌崩は崩れそうな岩の稜線で、両側が谷底まで切れ落ちている。ザックの重みに耐えながら、四つん這いになったり、立ち上がりたりして一步一步慎重に進む。張り詰めた緊張感を伴いつつ鎌崩の核心部を無事に通過し、皆安堵。再び笹の深い海を漕いで鹿の平へ。一面の笹原にシラビソの木々がぼつんぼつんと立っており、別世界。テントを設営後に稜線から250m下り取水した。昨日は取水できなかったため、冷たい水は心身ともに潤った。笹藪の中踏み跡をたどり不動岳(2171m)へ。テントサイトに戻り静寂の中宴が始まった。



鎌崩の核心部

写真提供：重廣恒夫

8月16日(日)曇のち晴

鎌崩ノ頭まで戻り登山道を下山した後、林道を下りながら何度も振り返り、鎌崩の稜線の名残を惜しんだ。

【コースタイム】

13日 戸中川林道ゲート12:58—15:35黒法師登山口16:32—17:38テントサイト

14日 テントサイト04:20—05:27ヤレヤレ平—07:07 P1780—08:04主脈尾根出合—09:07黒法師岳—11:26カモシカ平—12:28丸盆岳12:40—14:39テントサイト

15日 テントサイト05:45—07:08鎌崩始点—09:40鎌崩終了09:45—10:12鎌崩ノ頭—11:10鹿ノ平11:25—14:16不動岳—15:46テントサイト

16日 テントサイト05:05—6:00鎌崩ノ頭分岐—08:43不動岳登山口—10:59戸中川林道ゲート

【参加者】

重廣恒夫 野村珠生 松仲史朗 森本悠介 立野里織
計5名

支部山行15-16 県境縦走32

黒柄岳～明神ヶ岳～万寿峠～出灰川～空谷橋

山内幸子／前田正彰

8月22日(土)晴

前回離脱した勝手坂峠から黒柄岳に向かう。忠実に府境界を進み黒柄岳の三等三角点を踏む。頂上は広いが樹林の覆われており展望はない。電波等専用道路から府境界の急斜面を下り茨木亀岡線に下り府道6号線沿いの囲み石で囲まれた新しい四等三角点八田山を踏む。川をジャブジャブと越えて稜線に取り付き尾根歩き。蒸し暑かったが尾根に上がると風がありホッとす。府境界から少し離れた四等三角点杉生を踏み明神ヶ岳に向かう。田能からの登山道と合流すると道はよくなり明神ヶ岳へ到着。ここも灌木に覆われて展望はないが今日の行程の三分の二を越したので一休みする。みんなの顔がほころんでくる。頂上を過ぎると展望がよくなり亀岡盆地を取り巻く山々が見える。愛宕山や牛松山を眺め登山道を離れ目的地・万寿峠に降り立ち中畑回転場まで歩き今日の行程を終える。せみ時雨を聞きながら歩いた1日だった。(山内)

8月23日(日)晴

体操を終えて府境界の稜線を登る。瞬間的だがいきなりの急登、目覚ましのパンチだ。暑い稜線ではご馳走の涼風、鳥の声はしないが“ツクツクボウシ”と“ミンミンゼミ”が歓迎してくれる。一時間ほどで境界が90度南へ屈折する地点を通過。一度谷筋に出るとその東側にある西京都変電所の変圧器のうなりが聞こえてきた。厳密には府境界ではないが「三角点中畑」に立ち寄る。名前の付く山がない今日の縦走では唯一の山頂であった。この道中は久保さんに教えてもらった“マルミノヤマゴボウ”の群生地です。所々茜色のトラノオに似た花が咲いて

いた。三角点から下って出灰(いずりは)川に出た。川横の道は枯れ枝などで結構荒れていて歩きにくかった。極めつけは「渡渉」。それも立て続けに2回。裸足になって川に入るなんて何十年ぶりだろう。足元もおぼつかなく本当に苦勞し、時間も大幅にロスする結果となった。その後も崖道は悪路の連続で「冒険ごっこ」している雰囲気だった。櫛田浄水場の手前で水遊びを楽しんでいる子供連れの家族に会ったがさぞびっくりされたことだろう。櫛田浄水場で昼食となった。重廣さんが「本当の府境界は川の右岸だが危険なので、これからはその“近似値”である車道を歩く」と言われた。炎天下のアスファルト道で自分は履きおろしたばかりの靴でもあったので時々ふくらはぎに痛みを感じたが境界東側の付け根空谷橋まで踏査できたことになった。当初計画の『ポンポン山』は次回にまわすこととなり、市バスに乗ってJR高槻駅北口で解散した。(前田)



出灰川の渡渉

写真提供…重廣恒夫

【コースタイム】

22日 タクシー降車08:13—08:51勝手坂峠—09:35黒柄岳—10:51△八田山—12:37杉生分岐—12:54△杉生—14:47鉄塔—15:45△明神岳—15:54P507—16:39万寿峠—16:58中畑回転場

23日 万寿峠08:42—09:17中畑回転場分岐—10:13△中畑—10:40県境復帰点—11:36渡渉点—12:25櫛田浄水場12:50—13:53空谷橋県境離脱点

【参加者】

重廣恒夫 新本政子 岡田輝子 久保和恵 黒田記代
松仲史朗 村田かおり 山内幸子 (22日のみ) 廣田猛夫
(23日のみ) 立野里織 前田正彰 (会友) 若林朋世 (23日のみ) 青木昭

22日10名 23日12名

支部山行15-17 沢例会 槇尾山・青谷

茂木完治

8月30日(日)雨

滝畑のサカモギ谷を計画していたが天気が悪く、悪天でも登れる槇尾山の東槇尾川支流の青谷に変更した。青谷は葛城山系槇尾山の東にある裏槇尾と呼ばれる東槇尾川の支流である。全くの無名で小粒だが、楽しい谷であった。この谷は登るだけでなく、下りもあることで値打ちが倍加する。中流を横断するダイヤモンドトレールから懸垂しながら出合まで下り、そこから登り直すのだ。

滝畑の新関谷橋駐車場に車を置いて出発。ダイヤモンドトレールを歩き、ボテ峠で沢の準備をする。ボテ峠から下るとトレールは青谷を渡るの、そこから入渓する。すぐに10mの滝があって、懸垂下降する。滑床の谷を下るとまた二段10m滝があり、これも懸垂下降する。しばらく青い岩の滑床の谷を下る。また10mの滝があり、これは懸垂下降で釜の中に下りる。平坦になった谷をしばらく下ると数mの滝が連続する淵がある。それを下ると河原になり、左岸の土管から上に上がるとそこは採石場の跡で大きな池がある。

作業小屋の軒先で昼食してから谷を登り直す。最初の10m滝はつるつるで登れず左岸から巻く。2つ目の滝も直登は悪く、茂木と久保は左岸から巻く。3つ目の滝は直登するとダイヤモンドトレールが交わる。登山道が上がってボテ峠を越えて滝畑へ下った。

東槇尾川は最初に右岸から青谷が入り、その上の追分で猿子城山に直登する左俣が分岐する。左俣の奥には50mの滝がある。これは巻くしかないが、かなり悪い巻きである。東槇尾川本流はさらに中俣と右俣に分岐する。中俣は風倒木帯で谷が埋められて溯行価値が低いが、右俣はまあまあ滝もあり、飽きずに尾根の登山道へ上がれる。



青谷の滝を懸垂下降する 写真提供：辻 和雄

【コースタイム】

滝畑・新関谷橋詰09:50—10:45ボテ峠—10:55青谷渡沢点
(下降)—11:30一つ目滝—12:07二つ目滝—12:40三つ目滝
—13:05採石場(昼食)13:35—15:00渡沢点—15:15ボテ峠—
15:40新関谷橋詰

【参加者】

辻和雄 山内幸子 久保和恵 茂木完治 (会友)若林朋
世 (会員外)徳野嘉明 計6名

支部山行15-18 4000山グランプリ
大川嶺、笠取山、ウバホド山、中津明神山、
雨ヶ森

尾野益大

9月5日(土)晴のち曇

早朝、徳島から車で一路松山へ。久万高原町を経て四
国カルスト台地の北端、大川嶺山系に入る。天気も申し
分なく広い駐車場となった登山口からの景色も良い。

目指す大川嶺、笠取山ともに車道から最短路をたどれ
ば十数分で行けるので、「少しでも長く歩こう」と車道
を引き返して縦走する。まず地形と地図を照合し車道と
尾根の幅が最も狭い「ここから」と思う所から笹の中へ
踏み込んだ。露が残っていてズボンを濡らしながら、ゆ
っくり、ゆっくり。

北麓の久万では「大川嶺が2度白くなると、3度目は
里の村に雪が積む」と言うらしい。楽々と1500mの尾根
に達したので高度を稼いだ感覚もないが、久万郷といわ
れるこの地域の屋根を歩いていることになる。

二等三角点がある山頂から南東に下る。連嶺の顔とさ
れるツルギミツバツツジの群生は美事で、春頃の彩りが
想像された。足下には華麗なシコクフウロがそこここに
咲いて、アクセントとなっていた。

リーダーの重廣さんを先頭とするわれわれ関西・四国
支部混成パーティーと、今井さん率いる四国支部会友パ
ーティーが交差して間もなく、笠取山に着いた。今回、
綿密な計画を立ててくれた清家さんから周りの景色につ
いて解説を受け、記念写真を撮る。

時間に余裕があるため、東方に延びる尾根上にあるウ
バホド山に向かう。道のない尾根に行く。車道を横断し、
かつての牧場跡を経て東進。まとまったブナの林の中
にかすかに踏み跡があった。ブナがこれほど残っている山
域は四国では今や希少だ。小田深山溪谷辺りにかけて近
年までツキノワグマがいたことがうなずけた。四等三角
点を探し当てて昼食。やや雲が出てきたものの、車に帰

り着いたころには持ち直してきた。ここから中津明神山
まで車で往復。「あまりの楽々さで体力をもてあました」
と思われる重廣リーダーら数人は九合目ぐらまで歩いて
下り、合流。温泉につかって安居溪谷のバンガローへ。
今井さん、瀧さんが作ってくれた夕食をいただき、各自
自己紹介と歌を唄って就寝。外は雨が降っていた。

9月6日(日)雨

檜山集落から雨ヶ森の往復がこの日の計画だ。雨は止
まないが、大雨ではなかった。昨日の晴天が恨めしかっ
た。

登山口を探すのに少し苦労したが、後はどんどん上へ。
ありふれた杉林でやはり昨日との景観の違いが大きく、
山の印象が環境に左右されると改めて学ぶ。しっかりと
した踏み跡は、林道を串刺しに一気に山頂を目指してい
て、主稜線が近づいたころ、巻き道に変わった。ややブ
ッシュくさくなるが、誰も弱音を吐かない。黙々と両手
でササをかき分ける。登山口のアプローチが遠いため、
このルートで雨ヶ森を目指す人は決して多くないのだら
う。

予想以上にアップダウンがあり、尾根道も長かった。
灌木が出てきて数分、天辺に着いた。石囲いの祠が人く
ささを見せていて古来、雨乞いのため人々が集まったの
かもしれないと想像をめぐらせる。この日は願ってもい
ない雨だったが、実は雨乞いをする山ではなく「雨が多
い」ことに由来する山名なのかもしれない。天気が良け
れば椿山などが指呼の間に見えるはずだった。メンバー
の顔とカップだけがとても明るかった。

帰りは往路を下った。途中、林道をショートカットし
たが、東に振りすぎていることを知らず下っていると、
いつまでたっても登山道に合流せず、仕方なくどん
どん巻く羽目に。沢の源頭部を2度またぐ場面もあり、
無事に修正できたものの大いに反省させられた。

【コースタイム】

5日 徳島05:00=09:28笠取山駐車地—09:57大川嶺—
10:43笠取山—11:56ウバホド山—12:06昼食休憩地12:50—
13:05駐車地=14:57中津明神山—15:20取付道合流点=
17:30安居溪谷バンガロー

6日 泊地06:00=06:49雨ヶ森登山口—07:50 1000m 地
点—09:29雨ヶ森—10:48駐車地=12:42黒森山—13:00トマ
ト団地=帰路

【参加者】

重廣恒夫 新本政子 山内幸子 久保和恵 村田かおり
立野里織 岡田輝子 若林朋世 (四国支部)尾野益大
瀧由喜子 家段勝好 今井順一 清家一明 計13名

「本山寺山森林づくりの会」作業報告

秦 康夫

2015年7月2日(木)9:30～15:30

「高枝鋸」を使って、東海自然歩道周辺のツル切りと枝打ちを行った。高枝鋸は長く伸ばせば5m弱の高所までの枯枝を切り落とすことが出来る「優れモノ」だが、長くて重い上、両手を振り上げての作業となるため、首や腕の負担が大きい。いわば「弁慶の薙刀」をふるう様な按配で、刃先の鋭さ、重量等々、その使用や持ち運びには細心の注意が必要なることを実感した。枝打ち作業の傍ら5～6箇所の水切り溝の整備、掘り起こしを行った。これまでの作業で登山道の周辺は随分明るくなり道沿いのマントには実生が見られるようになってきた。(武田記)

【参加者】

斧田一陽 倉谷邦雄 阪下幸一 杉本佳英 武田壽夫
松波幹夫 計6名

2015年7月19日(日)9:30～15:30

東海自然歩道沿いには、まだかなりの枯損木が残っている。台風のシーズンになったので、今日は強風で道に倒れて来る可能性のある枯損木を処理することにした。径34cm程度の太い松が、伐倒後厄介な掛かり木になって苦労したがフェリングレバーを使って片付け、結局計6本程の枯損木を処理することが出来た。作業区域外ではあるが、大阪府有林側のナラ枯れ木の飛散防止処理、水切り溝の整備等、次々に手がけるべき作業が出てきて全員フル稼働の1日だった。

【参加者】

金井良碩 斧田一陽 中村賢三 武田壽夫 小櫃徹夫
猪川誠 倉谷邦雄 宮本廣 秦康夫 計9名

2015年8月6日(木)9:30～16:30

作業区域最高地点一帯の林床整備を行った。水切り溝の整備を進めながら作業場所まで登り、午前中はヒノキの高木の枝打ちと周辺の枯れ木整理をした。午後、東海自然歩道に向かって傾いているアカガシの大きな枯損木が、チェーンソーを使用しての伐倒後掛かり木になり、この処理には時間を費やした。径41cmでさほど太くはないが、約70年生の極めて堅い木だった。登山道脇にナラ枯れの目立つアカガシが数本あり、濡れタオルとビニールシートを巻いて拡散防止処置を施した。ナラ枯れは拡散がらぬ内に、とにかく早めに処置することが必要である。

【参加者】

斧田一陽 武田壽夫 小櫃徹夫 倉谷邦雄 杉本佳英
秦康夫 計6名

2015年8月16日(日)9:30～13:30

本山寺山の作業場所は標高500m程なので下界よりはまじだが、蒸し暑いことに変わりはない。残暑厳しいなか、3班に分かれて作業した。

1班は前回に引き続きナラ枯れ拡散防止処置を行ったが、直木でなく太い数本のアカガシが株立ち状態になっているなどで、厄介な作業となり、意外に時間がかかってしまった。

2班と3班は、高枝鋸を使って物置小屋西面の枝打ちのあと、南斜面に残る太い松の枯損木の処理や、繁茂し過ぎたヒサカキなど常緑樹の除伐・整備作業を行った。木の二股に引っ掛かって斜めに倒れている太い松の処理には苦労したが、高枝鋸が高所の木の切断にも威力を発揮した。この道具は枝打ち用だけでなく、使い道が多い。

昼食後茨木の極楽湯へ移動し、入浴の後、納涼懇親会を兼ねて今後の作業についての打合せを行った。

【参加者】

金井良碩 斧田一陽 阪下幸一 倉谷邦雄 丸山喜代司
福井誠 黒山泰弘 秦康夫 計8名

2015年9月3日(木)9:30～13:00

物置南斜面の林床整備を行った。斜面が急なため作業がやりにくかったが、林間を塞いで繁茂するヒサカキなど常緑樹類を適度に除伐・整理すると、林間は作業前に比し、大分明るくなった。

【参加者】

斧田一陽 小櫃徹夫 武田壽夫 石原順子 秦康夫
計5名

2015年9月20日(日)9:30～15:30

作業区域の最上部44林班「い」地区一帯の林床整備を行った。主な作業は高枝鋸を使っての高所の枝打ちと立ち枯れの枯損木除伐、落枝の整理等だが、参加人数が多いこともあって作業が進み、午前午後合わせて0.25ha程の整備ができた。

作業場所への行き帰りに、東海自然歩道の水切り溝7～8ヶ所の整備も行った。水切り溝は、流土や枯れ枝、落ち葉ですぐ埋まってしまうので、この作業は頻繁に実施する必要がある。

【参加者】

阪下幸一 斧田一陽 武田壽夫 薦田佳一 杉本佳英

茂木完治 須本淳史 倉谷邦雄 中村賢三 丸山喜代司

福井誠 秦康夫

計12名

スケッチ同好会例会の報告とご案内

第10回ご案内

日時 平成28年1月18日(月)10:00~15:00
 集合 近鉄当麻寺駅 10時10分
 行先 当麻寺周辺で二上山を描く
 申込 平成28年1月11日(月)迄 岩崎しのぶ
 e-mail: sinobunr4822@nike.eonet.ne.jp
 電話 0743-74-2259 携帯 090-5365-8446
 備考 小雨決行

第8回報告

日時：平成27年9月7日(月)・8日(火)
 行先：若狭 城山公園
【参加者】 野村哲夫 浅田博三 岩崎しのぶ 浦上
 芳啓 大塚和子 大塚宏暁 金井良碩
 久保和恵 佐野加代子 中谷絹子 播戸
 日出生 松上美代子 横山規江 森沢義
 信 計14名

第11回ご案内

日時 平成28年3月21日(月祝)10:00~15:00
 集合 京阪京津線 浜大津駅 9時50分
 行先 大津湖岸なぎさ公園
 申込 平成28年3月14日(月)迄 久保和恵
 e-mail: unclertorys05-kazu@nifty.com
 電話 079-565-0530 携帯 090-2598-9226
 備考 雨天の場合 関西支部ルームにて実施



日本海に開く明鏡洞 画 森沢義信

※共通事項

持ち物 水彩画を主とする画材一式、カメラ、
 弁当、飲み物、折り畳み椅子、傘など
 詳細は後日、参加申込者に通知します

水曜会のご案内

関西支部に入会早々の会員・会友(入会1年目程度)、入会希望の方々と、支部委員有志で毎月1回(水曜)交流会を開いています。気軽にご参加ください。

【会場】 支部ルーム 18:30~

【開催日】 1月13日(水)、2月3日(水)、3月9日(水)

【申込】 開催日は変更になる事がありますので、参加を予定している方は開催月の前月末までに担当者に実施日の確認と参加連絡をお願いします。

担当：辻 和雄 tsuji.kazuo@maia.eonet.ne.jp

【報告】

8月5日(水) カムチャッカ・アバチャ山登頂とフラワーハイキング 出席8名

9月9日(水) 宮崎支部30周年記念行事と九州の山 出席5名

10月14日(水) 表銀座・西穂山荘~焼岳、沢上谷、西上州の山 出席7名

80周年記念事業 募金者芳名一覧(2)

(2015年10月31日現在)

【会員】 10,000円 大塚宏園

【会員外】 30,000円 京都府立大学
山岳会

(累計6,000,000円)

第26回 藤木祭 会計報告

【収入の部】	
藤木高嶺氏より	10,000円
藤木氏ご親族野村様より	10,000円
< 拠出金 >	
兵庫県山岳連盟	40,000円
大阪府山岳連盟	40,000円
日本山岳会関西支部	40,000円
小 計	140,000円
< 雑収入 >	
利息	17円
前期繰越金	103,187円
合 計	243,204円

【支出の部】	
コーラス御礼	20,000円
演者謝礼(白馬堂 浅野晴良氏)	10,000円
印刷代	17,280円
通信費(チラシ送料 切手代)	2,706円
コピー代(歌詞)	1,000円
大谷茶屋支払	28,280円
大谷茶屋御礼	10,000円
おにぎり代(42個)	4,901円
雑費(打合諸費 運搬 乾電池等)	9,249円
小 計	103,416円
次期繰越金	139,788円
合 計	243,204円

平成27年9月28日

藤木祭実行委員会会計 久保和恵㊞

備考

※豊原様・河岡様(アルパインツアーサービス(株)社員)より 祝い酒およびワイン差し入れ

※斉藤氏のご厚意によりスピーカー無料借用

※記念山行参加者の保険料支出なし

Room日録 2015年

8月5日(水) 支部報編集委員会 水曜会	4日(金) 郵便物処理	20日(日) 郵便物処理
19日(水) 夏季懇準備	5日(土) 募金受付事務 水曜会準備	22日(火) 事務作業
21日(金) 広報委員会 事務引継ぎ(会員管理)	9日(水) 水曜会	23日(水) 事務作業
26日(水) 夏季懇打合せ	11日(金) 第9回ヒマラヤ塾	10月5日(月) 郵便物処理
9月2日(水) 郵便物処理	13日(日) 事務引継ぎ(会員管理)	7日(水) 郵便物処理
	14日(月) 蔵書を読む会	14日(水) 水曜会
	16日(水) 支部報161号発送 支部委員会	21日(水) 拡大総務委員会
		23日(金) 事務作業
		29日(木) 第10回ヒマラヤ塾

受贈一覧

(2015.8.1~10.31受理分)

山嶽寮：甲南山岳会通信 第70号
しづかの山 1 松本剛漫画 講談社
〔秦康夫寄贈〕
でこでこてっぺん：元祖元女子山マンガ
ゲキ画 山と溪谷社
〔秦康夫寄贈〕

日本山岳会「高尾の森」通信 vol.59
年次報告書2014 日本山岳会東京多摩
支部
山と人百年：神戸大学山岳会・山岳部
百年史 上・下巻
登山月報 第558号 日本山岳協会
日本山岳会支部報
・〔東京〕たま通信 第21号

・岐阜山岳 第78号
・東海支部報 No.143
・〔京都・滋賀〕支部だより No.120
・JAC北九だより No.74
・熊本支部報 No.35

※発行者による寄贈は、寄贈者名表示を省略

2016年1月~3月 支部山行計画

※申込先は、後のリストを参照してください【いずれも締切厳守】

15-33 陽だまり山行 青春18キップで行く播磨の山
「三日月町 御殿山351m」
日 時：1月7日(木)
集 合：JR姫路駅 姫新線乗場ホーム 9時40分集合
9時46分発の播磨新宮行乗車 播磨新宮乗換
三日月駅着10時45分
(大阪発8:30新快速 姫路着9:33)
コース：三日月駅-日限地蔵-御殿山-鉄塔道-味わ
いの里三日月-列祖神社・陣屋跡-三日月駅
地 図：2.5万分の1「三日月」
備 考：1日だけ願いを聞いてもらえる日限地蔵を見
学して御殿山に登ります
三日月藩の陣屋跡も見られます
少雨決行 歩行時間 約4時間半
姫新線の列車が少ないので帰りが少し遅くな
ります
青春切符(利用可 12月発売)各自でご準備く
ださい
申込み：12月20日迄(担当：山内幸子)

15-34 ゆるやか山行【里山探訪】歴史と文化を訪ねる29
「生駒山地 飯盛山」
日 時：1月14日(木)
集 合：JR野崎駅 9時30分集合

コース：JR野崎駅-慈眼寺-野外活動センター-飯
盛山-権現の滝-室池-JR四条駅
地 図：2.5万分の1「生駒山」
備 考：里山を歴史や文化を訪ねながらのんびり歩く
山行でコースを変更する場合があります
歩行距離約11km 歩行時間約5時間
申込み：1月7日迄(担当：久保和恵)

15-35 地図を見ながらしっかり歩こう
「北摂 五月山~天上ヶ岳~明ヶ田尾山~箕面」
日 時：1月16日(土)
コース：池田駅-千代山-天上ヶ岳-みのお記念の森
-鉢伏山-明ヶ田尾山-高山-北摂霊園-箕
面川ダム-箕面駅
地 図：2.5万分の一「伊丹」「広根」
備 考：地図で三角点を3つ以上確認しながら約20キ
ロ歩きます
申込み：1月1日迄(担当：山内幸子)

15-36 関西支部県境縦走37
日 時：1月23日(土)・24(日)
コース：前月の進捗状況によりコースが決まります
HP等で確認してください
備 考：詳しくは申込者に連絡します。
申込み：1月10日迄(担当：黒田記代)

15-37 4000山グランプリ

「福井の山 金毘羅山(625m)から国見山(656m)」
日 時：1月30日(土)・31日(日)
コース：福井駅＝下一光町－金毘羅山－国見山－森林公園＝福井駅
地 図：2.5万分の1「越前蒲生」
備 考：詳しくは担当者に問い合わせてください
難易度の高い山 テント山行 一般参加可
山岳保険加入が必須
80周年記念海外登山のトレーニング山行
申込み：1月20日迄(担当：重廣恒夫)

15-38 4000山グランプリ

「岡山の山 滝山(1197m)から那岐山(1240m)」
日 時：2月20日(土)・21日(日)
コース：津山駅＝みそぎ橋－滝山－那岐山－黒尾峠－智頭駅
地 図：2.5万分の1「日本原」「大背」「楢」
備 考：詳しくは担当者に問い合わせてください
難易度の高い山 テント山行 一般参加可
山岳保険加入が必須
80周年記念海外登山のトレーニング山行
申込み：2月10日迄(担当：重廣恒夫)

15-39 ゆるやか山行【里山探訪】歴史と文化を訪ねる30

「丹生山系 帝釈山・丹生山」
日 時：2月25日(木)
集 合：神鉄箕谷駅 9時40分集合
コース：神鉄箕谷駅(神戸市バス)丹生神社前バス停－丹生神社分岐－コル－帝釈山－コル－丹生山－衝原バス停(神戸市バス)神鉄箕谷駅
地 図：2.5万分の1「淡河」
備 考：里山を歴史や文化を訪ねながらのんびり歩く山行でコースを変更する場合があります
歩行距離約7km 歩行時間約4時間
申込み：2月18日迄(担当：久保和恵)

15-40 関西支部県境縦走38

日 時：2月27日(土)・28日(日)
コース：前月の進捗状況によりコースが決まります
HP等で確認してください
備 考：詳しくは申込者に連絡します。
申込み：2月14日迄(担当：黒田記代)

15-41 4000山グランプリ

「両白山地 丸山(1786m)から芦倉山(1717m)」
日 時：3月12日(土)・13日(日)
コース：美濃白鳥駅＝石徹白－丸山－石徹白＝美濃白

鳥駅

地 図：2.5万分の1「二ノ峰」
備 考：詳しくは担当者に問い合わせてください
難易度の高い山 テント山行 一般参加可
山岳保険加入が必須
80周年記念海外登山のトレーニング山行
申込み：3月2日迄(担当：重廣恒夫)

15-42 ゆるやか山行【里山探訪】歴史と文化を訪ねる31

「広嶺山系 弥高山・広嶺山・増位山」
日 時：3月24日(木)
集 合：JR播但線・砥堀駅 9時40分集合
コース：JR砥堀駅－広嶺神社分岐－峠－弥高山－吉備神社－広嶺山－随願寺－増位山－JR野里駅
地 図：2.5万分の1「姫路北部」
備 考：里山を歴史や文化を訪ねながらのんびり歩く山行でコースを変更する場合があります
歩行距離約13km 歩行時間約4時間30分
申込み：3月17日迄(担当：久保和恵)

15-43 関西支部県境縦走39

日 時：3月26日(土)・27日(日)
コース：前月の進捗状況によりコースが決まります
HP等で確認してください
備 考：詳しくは申込者に連絡します。
申込み：3月15日迄(担当：黒田記代)

15-44 海外トレッキング

「ベトナム最高峰ファンシーバン登頂と世界遺産ハロン湾クルーズ8日間」
日 時：3月28日(月)～4月4日(月)
備 考：詳細は同封リーフレット参照してください

各山行は
担当委員もしくは支部宛に申し込んでください。
E-mail: kansai.jac@canvas.ocn.ne.jp

* * *

「蔵書を読む会」のご案内

2月8日(月) 13:00～17:00 予定
於：支部ルーム

ステップアップ登山教室

一般対象 募集中

3rdステップ

初級『地図とコンパスを持って六甲山を歩く』

高峰

1月12日(火) 双子山～石楠花山～新穂高～摩耶山～山寺尾根

2月18日(木) 五助堰堤～西滝ヶ谷～極楽茶屋跡～小川谷

2月9日(火) 五助堰堤～五助山～ガーデンテラス～天狗岩南尾根

3月17日(木) 寒天橋～西山谷～ダイヤモンドポイント～水晶山

3月8日(火) エデンの園～小笹峠～岩原山～ナガモッコク尾根～知るべき

上級『岩登り・沢の初歩・雪山の初歩』

1月26日(火) 雪山 比良山・蓬莱山

中級『沢歩き』

2月16日(火) 雪山 比良山・堂満岳

1月7日(木) 百間滝～似以滝～白石滝～六甲最

3月15日(火) 雪山 比良山・蓬莱山

2016年 1月～3月 自然保護行事

1 日本山岳会関西支部本山寺山の森（本山寺山森林づくりの会活動）

- ・ 1月7日(木) 安全祈願 林床・作業道整備(45班)
- ・ 1月17日(日) 林床・作業道整備 天然林伐採(45班)
- ・ 2月4日(木) 林床整備 天然林伐採(45班)
- ・ 2月21日(日) 自然観察 林床整備 天然林伐採(45班)
- ・ 3月3日(木) 林床整備 天然林伐採(45班)
- ・ 3月20日(日) 林床・作業道整備 天然林伐採(45班)

2 自然観察会

- ・ 2月21日(日) 「本山寺山の森」の冬の自然観察 鹿捕獲場所観察 鹿の食害被害木・ナラ枯れ木観察

3 やまみち巡視保全活動

- ・ 1月17日(日) 「本山寺山の森」里道巡視保全
- ・ 3月20日(日) 「本山寺山の森」里道巡視保全

問い合わせ・申込み先

斧田一陽 TEL&FAX 072-633-6556/090-4037-4542
※締め切り：開催日の一週間前まで

新年会のご案内

関西支部恒例の新年会を下記のとおり開催いたします。
お誘い合わせのうえご出席くださいますようお願い申し上げます。

日 時 2016年1月27日(水) 18時30分～
会 場 大阪梅田「大東洋」 電話06-6312-7525
会 費 6,000円

出欠は同封のハガキに52円切手を貼って、1月17日までにご投函ください。
連絡先 水谷透 ☎06-7161-2252

ナカニシヤ出版

606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15 (税抜)
TEL 075-723-0111 / FAX 075-723-0095

日本山岳会110周年記念出版

南山城 石仏の里を歩く
石田正道 著◎木津川に沿って古道を歩き石造物をめぐる南山城から伊賀へのんびりウォーキング。1800円で計172山・92コースを完全ガイド。2000円

奈良名山案内
エスカルゴ山の会編 奈良盆地周辺から大峰・台高まで計172山・92コースを完全ガイド。2000円

京都神社と寺院の森
渡辺弘之 著◎京の社叢めぐり 神木や天然記念物など、市内約200社寺の貴重な樹木を紹介。1800円



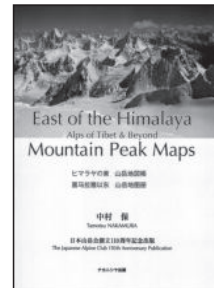
東部カラコルムからアッサムまで、東西約千kmに広がるインド・ヒマラヤを13の山域に大別して624座を厳選し、各山域の概説と入山事情、概念図と写真、登山記録と登山史、文献などを集約した。

インド・ヒマラヤ

日本山岳会東海支部 編著

A5判上製 650頁 6000円

12月刊



この地図帳は、世界の登山界では例のない画期的な業績と言えるだろう。中国でも出ていないきわめて精密詳細な地図と、まったく未知であった山、山群の写真。次の世代に残す価値のある作品だ。……斎藤惇生

中村保 著

菊判 (304×218) 352頁 10000円

1月刊

◎冒険者に残されたチベット東部・横断山脈の全貌
ヒマラヤの東山岳地図帳
チベットのアルプスとその彼方

地の果てパタゴニア。風と氷河が作り出した美しい岩峰に迫る

インドの南に浮かぶスリランカをコンパクトな日程で巡る特別企画

大阪(関空)からツアーリーダー全行程同行
**パタゴニア・パイネ&フィッツロイ山群
トレッキングとイグアスの滝 14日間**

大阪(関空)からツアーリーダー全行程同行
**アダムス・ピーク(スリー・パーダ)登頂と
スリランカの5つの世界遺産を巡る 7日間**

出発日～帰着日	旅行代金 (大阪発着)
残6 2/6(土)～2/19(金)	¥978,000

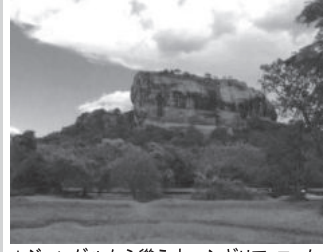
出発日～帰着日	旅行代金 (大阪発着)
残2 1/16(土)～1/22(金)	¥272,000
増設 3/12(土)～3/18(金)	¥288,000

エミレーツ航空を利用し、大阪発着でパタゴニアへ。チリ側のパイネとアルゼンチン側のフィッツロイの両山群で歩き応えのあるトレッキングを楽しみます。また世界三大瀑布の1つイグアスの滝も訪れます。



▲美しい山容を誇るフィッツロイ

スリランカ最大の聖地アダムス・ピークの山頂を目指します。また動植物豊かなホールド・ブレインズ国立公園や巨大な岩山シギリヤ・ロックなど5つの世界遺産を巡るおすすめ企画です。



▲ジャングルから聳え立つシギリヤ・ロック

—◇お知らせ◇—

「ロングトレイル倶楽部」のご案内

世界を代表する「ロングトレイル」の名にふさわしい、各コースをご紹介するロングトレイル倶楽部。専用カタログをご用意しておりますので、お気軽にご請求ください。

◇—アルパイン・メイト・ポイントのご案内—◇

- 当社海外ツアーにご参加いただくと、旅行代金の1%にあたるポイントが帰国翌日に自動加算されます。
- 貯まったポイントは次回の割引やアウトドアグッズへ交換可能。
- 入会金や年会費、面倒な手続きなどは一切不要です。

「アルパイン・メイト・ポイント」の詳細はお問合せください。



観光庁長官登録旅行業第490号(第1種)/一般社団法人日本旅行業協会 正会員 ●ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社

大阪 06-6444-3033
〒550-0003 大阪市西区京町堀1-4-3 (TGF肥後橋ビル2階)

〈編集後記〉

住吉仙也さん、松浦輝夫さんと、関西支部ゆかりのビッグネームの訃報が続きました。関西支部に入りまだ10年足らず、なかなか機会に恵まれることができず、これら大先輩と呼ぶにもおこがましい方々と、実際にお会いし、お話することもできないままに、逝ってしまわれました。振り返れば、わが関西支部にはまだまだ指導を受け、貴重なお話を聞いてみたい方々がたくさんおられます。時間は過ぎていきます。山は逃げませんが、時間はどんどん逃げて行きます。様々なことを考える今日このごろです。ご冥福をお祈りいたします。(加藤)

発行日 2015(平成27)年12月10日
発行所 〒530-0015 大阪市北区中崎西1-4-22 梅田東ビル3階 304号室
公益社団法人 日本山岳会関西支部
e-mail: kansai.jac@canvas.ocn.ne.jp
郵便振替口座 00930-6-55950
発行者 金井良碩
編集 加藤芳樹 久保和恵 野口恒雄 水谷 透
制作 株式会社 双陽社 大阪市北区堂島2-2-28